様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：１１６０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ１２９１９

研究課題名（和文）1920年代における反理論に関するメディア受容の研究

研究課題名（英文）Media Reception Studies on Anti-theory in the 1920s

研究代表者
新藤　雄介（SHINDO, Yusuke）

福島大学・行政政策学類・准教授

研究者番号：３０７７３０６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、理論の高度化が進む1920年代における反理論（理論の否定・批判・疑義）の状況について、雑誌メディアを通した受容の視点から調査を行った。（Ⅰ）『文芸戦線』における中西伊之助からマルクス主義者への理論批判に端を発する論争を取り上げ、理論批判とそれへの再批判の状況を明らかにした。次に、（Ⅱ）農民自治会に焦点を当て、その機関紙『農民自治』の会員による反理論の状況を捉えた。その上で、（Ⅲ）地方農民である渋谷定輔に着目し、理論が日常の実生活との関わりの中で批判される構造を明らかにした。最後に、（Ⅳ）社会運動に関わる雑誌での読者による反理論の状況と、編集部のそれに対する対応を捉えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
（Ⅰ）『文芸戦線』における反理論の論争では、理論的な傾向が強い雑誌の内部で、理論に批判的な人々も存在することが明らかとなった。（Ⅱ）農民たちによる運動と反理論では、農民運動に参加する人々が、農村の実情を知らずに理論を使うことに批判的であったことが明らかになった。（Ⅲ）地方農民における日常生活からの反理論では、農民の渋谷定輔がパンフレットなどからマルクス主義の知識を得ていたが、理論そのものには批判的な態度を示していたことが明らかとなった。（Ⅳ）雑誌における読者の反理論と編集部による対応では、『戦旗』などで読者からの難解の批判に、編集部が応え平易化を目指して努力していたことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This research investigated how social theory in Japan was accepted in 1920s. We examined magazines in 1920s in terms of the way readers received the theory. (I) We researched the controversy in the Bungei-sensen magazine, which was evoked by Inosuke Nakanishi. (II) We examined the Noumin-jichi magazine. (III) We investigated the reason Teisuke Shibuya, a peasant activist, criticized the theory from the standpoint of the daily life. (IV) We examined the magazines for social movement and the relationship between the editors and their readers.

研究分野：社会学・メディア史

キーワード：メディア　雑誌　反理論　社会運動　受容　読者　パンフレット　マルクス主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

20 世紀の社会と学問において、カール・マルクスの思想は強い影響を与えた。そのためマルクスの思想に強い関心が集まり、しばしばその思想に対する立場をめぐって、激しい対立や論争が行われてきた。日本では、1920 年代に「理論闘争」（福本和夫）が展開され、マルクスの思想の理論的検討が急速に進んだ。その結果として、福本イズムと山川イズムの対立や、それに続く日本資本主義論争における講座派と労農派の対立を生み出した。そして、福本イズムと山川イズムの対立は、マルクス主義における共産党系と非共産党系を生み出し、戦後には、日本共産党と日本社会党として、政治や社会にも影響を及ぼした。

その一方で、1920 年代の人々の理解状況を探ると、この対立関係を必要以上に重視することには、疑問が生じる。なぜならば、福本和夫が発表した論考は、当時の論壇の知識人でさえ、あまりに理論的過ぎて難解だったために、ほとんど理解できなかったという回顧があるからである。

こうした観点を研究開始当初の背景として、1920 年代の高度な理論を当時の読者や運動に加わった一般の人々が、どのようなものとして受容したのかを捉えることを試みた。

２．研究の目的

本研究の目的は、理論の高度化が進む 1920 年代における反理論（理論の否定・批判・疑義）の状況について、雑誌メディアを通した受容の視点から明らかにすることである。これにより、今までの思想面から理論に焦点を当てた研究とは異なる、当時の一般の読者や運動の参加者からの理論状況を捉えることをめざした。

３．研究の方法

研究に際しては、次の 4 つの課題を設定した。（Ⅰ）『文芸戦線』における反理論の論争では、1926 年の『文芸戦線』における、同人の中西伊之助から提起されたマルクス主義者たちの理論への批判と論争を取り扱った。（Ⅱ）農民たちによる運動と反理論では、中西伊之助が理論への反発から設立した農民自治会の雑誌『農民自治』に焦点を当て、会員による反理論の状況を捉えた。（Ⅲ）地方農民における日常生活からの反理論では、『農民自治』の同人であった渋谷定輔の日記や書簡など渋谷定輔文庫の資料から、反理論意識の形成過程を詳細に取り扱った。（Ⅳ）雑誌における読者の反理論と編集部による対応では、社会運動に関係していた雑誌『文芸戦線』・『戦旗』・『労農』・『マルクス主義』・『何を読むべきか』における、読者と編集部の理論をめぐるやり取りとそこから生じた雑誌の変化を取り扱った。

４．研究成果

（Ⅰ）『文芸戦線』における反理論の論争

プロタリア文学作家の中西伊之助は、当時のマルクス主義を巡る状況に対して不満を募らせていた。そのため、中西は「Ｙに贈る手紙」『文芸戦線』3 巻 8 号（1926 年 8 月）で、文芸批評家の水野正次を「概念的マルキスト」だとして批判した。「概念的マルキスト」と侮辱的な表現で批判された水野正次は、「中西氏への返事」『文芸戦線』3 巻 9 号（1926 年 9 月）で、理論のみを指摘し非難する中西に対して、理論だけの概念的な立場ではないとして、マルキストの立場から反論した。こうした水野からの反論に対して、中西は再び水野を批判し、「戦線語」『文芸戦線』3 巻 10 号（1926 年 10 月）で、水野の返答それ自体が、まさに水野は「概念的マルキスト」であると、意図せざる告白をしていると批判した。

また『文芸戦線』では、水野正次や山田清三郎らが合評会を行い、「小堀甚二論」『文芸戦線』3 巻 10 号（1926 年 10 月）で、プロレタリア作家の小堀甚二はブルジョアや理論を理解していないなどの否定的な評価を下した。こうした評価に対して、小堀甚二は極めて強い反感を表明し、「一言なきを得ない」『文芸戦線』3 巻 11 号（1926 年 11 月）で、山田や水野が語る「理論」は、概念的なものであり、ともすれば見せびらかしのためのものとして使われており、啓蒙する者が持つ傲慢さの不快感を表明した。結局、水野正次は、「戦線語」『文芸戦線』『文芸戦線』3 巻 12 号（1926 年 12 月）で、理論にのみ拘泥し過ぎたとして反省の言葉を述べるのであった。

以上のように、『文芸戦線』で行われた、理論と反理論をめぐる論争を捉えた。

（Ⅱ）農民たちによる運動と反理論

農民自治会設立以前から、マルクス主義関連の書物を受容する一方で、マルクス主義や理論に対して否定的な考えを抱いていた渋谷定輔は、「行動へ！行動へ！」『農民自治』7 号（1927 年 1 月）で、自分たち農民にとって、理論が理論だけとして存在するのであれば、無価値だと言い切り、渋谷は理論よりも実行と行動を重視するのであった。

こうした理論への反発は、農民自治会の会員の間でも共有されていた。ある者は、「委員会雑感」『農民自治』9 号（1927 年 4 月）で、この時期に福本和夫によって唱えられていた「理論闘争」について、たとえプロレタリアの解放を主張している者であったとしても難解な用語を用い

て、「理論闘争」を行うが、こうした状態はまるで既存の支配者の振る舞いと同様ではないかと非難した。
　このような理論への懐疑や反発は、他の会員によっても指摘され、「勇ましすぎる都会からの観念論」『農民自治』11 号（1927 年 8 月）では、農民自治会への批判にもっともらしい理論が書かれていたものがあったが、それが現実とどれだけ関りがあることなのか、として理論への批判がなされていた。また、別の者は、「農民の微妙な心理をつかんだ上で」『農民自治』11 号（1927 年 8 月）で、理論を語る人々に対して、まずは農村に来てその現実に触れよ、として理論を批判した。なぜならば、理論が示す農村と実際の農村は違うからだとした。
　以上のように、『農民自治』で会員から主張された反理論を捉えた。

（Ⅲ）地方農民における日常生活からの反理論
　渋谷はマルクスが書いた『共産党宣言』にはほとんど興味を示さず（1925 年 11 月 16 日、以下日記の日付）、マルクス関係の知識は、山川均・田所照明編『プロレタリア経済学』や山川均『資本主義のからくり』などマルクスの思想のパンフレットや解説書を通して知識を手に入れていた（1925 年 5 月 6 日、1925 年 11 月 2 日）。それは、間接的マルクス主義摂取といえるものであった。
　渋谷にしてみれば、農業という自然が相手の労働では、環境条件の変化などに振り回される労苦を、マルクス主義は捉えていない（1926 年 5 月 11 日）。渋谷が農業に従事する中から出て来る実感として、マルクスの労働価値説では測れないものであると捉えていた（1926 年 4 月 13 日）。渋谷が農民としての生活において直面する矛盾や苦悩を、マルクスの思想は捉えられていない、と渋谷は思っていたのである（1926 年 5 月 29 日）。こうしたことから、渋谷は、理論を実社会に当てはめようとする者に、冷ややかな眼差しを向けていた（1926 年 5 月 7 日）。
　以上のように、渋谷は農民の生活実感との齟齬から、マルクス主義に批判的な立場であったことを捉えた。

（Ⅳ）雑誌における読者の反理論と編集部による対応
　1924 年 5 月に創刊した『マルクス主義』は、極めて理論性の強い雑誌であった。創刊号では、「編輯後記」『マルクス主義』1 巻 1 号（1924 年 5 月）で、「研究」のための雑誌であることを宣言した。それゆえ、編集部による「編輯後記」『マルクス主義』1 巻 6 号（1924 年 10 月）では、研究雑誌として育て上げることが当面の急務だとした。しかし、研究雑誌として理論を追求することは、その結果として、内容の高度化による難解さを伴わざるをえなかった。読者からのこの声に対して、編集部は、「編輯後記」『マルクス主義』14 号（1925 年 6 月）で、あくまで理論を重視し、そのためには難解さという犠牲は止むを得ないとした。
　1928 年 5 月に創刊した『戦旗』は、支持者を獲得し運動を広げていくために、これまで運動や組合といった組織に加わっていない人々に、『戦旗』などを読んでもらう必要があった。『戦旗』への難解さを指摘する声として、早いもので創刊から 6 号目の「苦言二三」『戦旗』1 巻 6 号（1928 年 10 月）に、大衆の中に入るためには難解であってはならないとして批判が掲載された。また、ある女性読者は、「女工を組織するには」『戦旗』3 巻 2 号（1930 年 2 月）で、女工をはじめ賃金労働者たちはそもそも字を読むことに困難があり、難しい言葉は理解できないと指摘した。
　こうした状況に対して、『戦旗』の編集部は、「文書の書き方について」『戦旗』2 巻 11 号（1929 年 11 月）で、雑誌の執筆者たちに向けてわかりやすく書くように呼び掛けた。その後も、『戦旗』編集部は読者の要望を受け入れて、「編輯ノート」『戦旗』3 巻 9 号（1930 年 6 月）で、振り仮名を採用したことを伝えるなどして対応していた。こうした編集部の対応について、読者からは「赤い隅」『戦旗』3 巻 11 号（1930 年 7 月）で、振り仮名の採用などについて喜びの声を伝えた。
　このような読者と編集部のやり取りは、『文芸戦線』・『労農』・『何を読むべきか』でも、それぞれの形で確認することができた。

（Ⅴ）予期しない事象により得られた新たな知見や今後の展望
　新型コロナウイルスの感染拡大により、図書館や資料館への調査が難しいことから、当初の調査予定には入っていなかった『何を読むべきか』およびその関係雑誌の調査を進めることとなった。この調査から、難解な理論を労働者や農民にどのように届けようかと努力する状況と、それが困難な状況を別の角度から捉えることができた。
　今後の展望としては、1930 年代から 40 年代の状況を捉え、戦時期に入り社会運動が困難になった時代に、雑誌やそれに関わった人々がどう変化し、対応したのかの調査を行う予定である。特に、雑誌と社会運動のネットワーク化の関係や、戦中における社会運動家と大政翼賛会と関わりや、戦中と戦後の連続性に焦点を当てて取り組む構想をしている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 新藤雄介	４．巻 （東京大学、社会情報学博士）
２．論文標題 「読書装置と知のメディア史――近代日本における書物をめぐる実践」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 博士論文	６．最初と最後の頁 1-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 新藤雄介	４．巻 49号
２．論文標題 雑誌『農民自治』と渋谷定輔の社会運動――農民における理論と反理論の相克	５．発行年 2019年
３．雑誌名 出版研究	６．最初と最後の頁 45-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 新藤雄介
２．発表標題 「昭和初年代の社会運動と手紙というコミュニケーション――運動と雑誌の挫折の後に」
３．学会等名 日本マス・コミュニケーション学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 新藤雄介
２．発表標題 前期における渋谷定輔の出版活動――『農民自治』の創刊と廃刊への道程
３．学会等名 メディア史研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 新藤雄介
２．発表標題 戦前の農民運動家・渋谷定輔日記原本と往復書簡――理論と反理論の行方
３．学会等名 「近代日本の日記文化と自己表象」研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 有山輝雄・新藤雄介・佐藤彰宣
２．発表標題 研究技法の共有と継承――研究の現場からシーズン0：資料の方法論
３．学会等名 日本マス・コミュニケーション学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 新藤雄介
２．発表標題 農民運動家にとっての社会主義と宗教観――渋谷定輔の社会運動とメディア
３．学会等名 「メディア宗教」研究会（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

１．著者名 落合教幸・ 阪本博志・ 藤井淑禎・ 渡辺憲司編	４．発行年 2021年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 851
３．書名 江戸川乱歩大辞典	

１．著者名 新藤雄介編	４．発行年 2021年
２．出版社 不二出版	５．総ページ数 印刷中
３．書名 何を読むべきか・読書・知識・生きた新聞（復刻版）（近刊）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関